



# 震災から7年。いまこそ 地域医療の「創造的復興」を。

健やかな未来のために、行政がいま取り組まなければならない課題とは何か。  
シリーズ最終回は宮城県の地域医療再生を紹介する。

女優

紺野美沙子さん

宮城県知事

村井嘉浩さん

**紺野** 東日本大震災からもう七年が過ぎましたね。

**村井** 知事として二期目だったんですが、あのあとの一、二カ月の記憶ってあまりないんですよ。とにかく忙しすぎて。

**紺野** それだけ大変だったということですね。今日は地域医療のお話をうかがうんですが、震災前から、かなりきびしい状況だったんですか？

**村井** 東北全体が同じような状況ですが、高齢化が加速度的に進む地域でして、震災前から医師を含めた医療人材の確保が悩みの種でした。たとえば平成十八年の宮城県の人口十万人あたりのお医者さんが二〇・八七人。これは全国平均の二一・七五人を大きく下回っていましたし、仙台医療圏とそれ以外の地域では二・四倍の開きがあったんです。

**紺野** 全体の数が足りない中で、仙台にお医者さんが集中してい

たわけですね。

**村井** 仙台市以外の地域は非常に深刻な状況でした。そこで、国の財源をいただきながら「地域医療再生計画」をつくったんですが、そこに震災が起こった。

**紺野** 震災が危機的状況にさらに拍車をかけたと……。

**村井** 沿岸部は全部流されて、病院も機能が停止してしまいましたから。助かった医療関係者も出て行ったきりで、なかなか戻ってきてくれなかった。なかでもいちばん困ったのは、医療データです。薬のデータ、検査のデータが全部流失してしまっただけです。情報を共有することがいかに大切か痛感したことから、MMWIN（みやぎ医療福祉情報ネットワーク）というシステムが構築されました。これは医療と福祉と介護と、そして薬も含めて、情報を一つのホストコンピュータで管理しようというものです。

**紺野** 被災地ならではの視点ですね。

ピンチをチャンスに。  
逆転の発想でチャレンジ

**村井** 震災のときは大変なピンチだったんですけど、逆にいうとチャンスじゃないか、そう思うようにしようと思ったんです。今までやりたくてもやれなかったこと、相手にされなかったことができるんじゃないかと。

**紺野** 知事は震災後、単なる「復旧」に終わらせるんじゃないかと、新しい宮城をつくる「復興」をめぐると、いろいろな場で発言されていきましたよね。

**村井** 元に戻すというのは、いちばん難しいようでいて、実は簡単なことなんです。誰も文句を言いませんからね。でも、まわりの復興に十年かかるとすると、元に戻したところで、十年遅れのまちが出来るだけなんです。時代の流れは早いですが

ら、その先を見越していろんなことをやっていかないとけない。そう思って、「創造的復興」ということを掲げ、いろいろなことにチャレンジさせてもらっています。

**紺野** 一昨年、東北医科薬科大学に医学部が新設されましたが、それもチャレンジの一環だったんですか？

**村井** 実現にいたるまで、結構大変だったんです。なにしろ国内では三十七年ぶりの医学部新設ですからね。東北大学に医学部がありますが、旧七帝大がある県で医学部がひとつしかない県は、宮城県だけなんです。

**紺野** えっ、知りませんでした。

**村井** 六十五歳以上の高齢者の数というのはずっと増え続けて、二〇四〇年に高齢者の絶対数がピークを迎えるんですよ。七十五歳以上の人口のピークはさらにそこから五年後の二〇四五年。ですから、そこま

では絶対的に医師は不足するんです。その時点まである程度増やしていったら、そこから減らしていくような施策をとっていいんじゃないかと、わたしは総理に直談判したんです。それも、専門医ばかりを増やすのではなく、幅広い臨床能力を持つ総合診療医を養成して、東北全体に輩出するような形をつくるべきだ。そして、きびしい審査を経て、東北医科薬科大学が選ばれたんです。

**紺野** 地域医療を担うドクタージェネラルを養成するための学部ということですね。

**村井** はい。入学定員百名なんです。その中の三十名を宮城枠として設けました。修学資金

上：医学部が新設された東北医科薬科大学。地域医療を担う総合診療医の育成をめざす  
下：産・官・学一体となった健康づくりを。2年前「スマートみやぎ健民会議」が発足



肺がんをより早く発見するために、  
一生懸命、走っています。



肺がんは、早く見つかるほどいい。

沿岸被災地域の人々にCT検診を行う「みやぎ健診プラザ」。

海沿いの道を大きな車が走っていく。後を追ってみると、ある会社の前で止まった。そう、この車は、CT検診車なのだ。宮城県仙台市にある『みやぎ健診プラザ』では、沿岸被災地域の人たちのために、車で肺がんのCT検診を行っている。従来と比べ、心臓などの陰にある小さながんもチェックできるため、早期発見が可能になったという。現在、死亡率の高い肺がんだが、見つかるのが早ければ早いほど生存率が高まるのだ。仕事で忙しく病院に行く時間がない、従業員が多く予約を取るのが大変といった様々な理由で受診が困難な人の動く病院となっている。まさに、宮城県の人々の命のために走り続けているのだ。ある医師がこう言った。「もっともっと、たくさんの



人に検査を受けてもらいたい。肺がんになっても大丈夫と言えるのが当たり前の中になってほしい」。病院で、ただ患者を待つだけが医師の仕事ではない。自分たちで出向き、人と触れ合い、検診する。そこに住む、そこに働く人の命を守ることも地域貢献だ。SGグループの活動がそう語っていた。

その地の、その人と、ともに。

東北医療福祉事業協同組合

青森県八戸市大字河原木字八太郎山10-81 <http://www.sg-kumiai.or.jp>

SG GROUP

広瀬病院 / 川崎こころ病院 / 介護老人保健施設なとり / 介護老人保健施設なかだ / 地域密着型特別養護老人ホームにこびあいわて



村井嘉浩

Yoshihiro Murai

昭和35年生まれ、59年防衛大学校卒業後、陸上自衛官に任官。幹部候補生学校を経て陸上自衛隊東北方面航空隊、宮城地方連絡部募集課に勤務。平成4年陸上自衛隊を退職し松下政経塾に入塾。7年宮城県議会議員に初当選。県議を3期勤め、17年宮城県知事選挙に当選。現在4期目。

の原資を県が拠出するので、医師になつたら十年間県内の病院で働いてもらうという義務年限を設けたわけです。初年度の入学者が卒業して、初期研修を終えるまでに八年かかります。いま三年生ですから、あと五年。それ以降、三十人ずつ十年で、三百人のお医者さんが地域のために働いてくれる仕組みができてあがるわけです。

健康づくりに取り組み

増えるとお医者さんが疲弊してしまいますからね。みんな考えていかなないと。

健康診断をちゃんとうけて、食生活を改善するとか、運動習慣をつけるとか……。

でも残念ながら、宮城県はメタボリックシンドロームの該当者と予備群の割合が極めて高いんです。全国ワースト三位。みんな車を使って歩かないんですよ。平均歩数が全国ワースト七位。それから一日の食塩の摂取量が、男性はなんとワースト一位。

自分の健康は自分で守るという意識が必要かも。

村井 その通りです。なんでもかんでもすぐ病院に行って診てもらおうという、コンビニ受診が

紺野美沙子

Misako Konno

昭和55年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかたわら、平成10年には国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活躍している。平成22年秋から、「紺野美沙子の朗読座」を主宰している。

村井 ただ、そうは言っても

頑張っているところです。

紺野 あらあら、困った。村井 とにかく健康に悪いことばかりやってるんですよ。喫煙率も高いですしね。そこで、何か働きかけをしなきゃいけないということで、二年前に「スマートみやぎ健民会議」というものを立ち上げました。行政、企業、病院、大学、市町村……とにかくみんなに入ってもらって、県民運動でやろうじゃないかと。キヤッチコピーは「減塩！あと3g」、「歩こう！あと15分」、それから「めざせ！受動喫煙ゼロ」。

なかなか歩いてくれない。そこで、「みやぎヘルスサテライトステーション」というのをつくりました。民間の大きなスーパー、具体的に言うといオンさんなんですけど、店内四カ所を回ってカードをかざすと、記録されてポイントがつくという取り組みを始めたんです。イオンさん、広いですからね、結構大変なんです（笑）。そんな工夫を重ねながら、なんとかみんなと健康寿命を延ばしていこうと

